

C—23 四天王寺舞楽衣裳に用いられている色彩について

四天王寺女短大 今津 玲子

1. 舞楽、雅楽は、現在わが国にのみ伝承される世界に誇るべき古典芸能であり、宮中をはじめ、各地の大きな寺院や神社等に伝えられて来た。四天王寺は創建以来一千数百年、焼亡と再建の繰返しで、その間舞楽の伝承も幾度か途絶しかけた。応仁の乱(1467)以後、京都、奈良の楽家が潰滅に近い有様になったあとは、四天王寺楽所の健在により、その伝統は護りぬかれた。幸にも、慶長年間、四天王寺舞楽は再興され、その当時新調された多数の装束類は今も現存し、昭和41年4月、重要文化財に指定された。私は機会を得て四天王寺舞楽を鑑賞し、年々変褪色し、脆化して行くであろう華麗な衣裳に、限りない愛着を覚え、その現存の色彩や配色を少しでも記録に残したいと考えて、本調査を行なった。

2. 本調査では平舞装束の一部である半臂を、視感比色法で測定し、修正マンセル表色系による色の表示、配色構成、及び文献により日本色名、並びに使用されたと推定される染料名を記述した。

3. 調査の結果、繊維材料は絹であり、推定される使用染料は、藍、紅、刈安、黄蘗(きはだ)などである。色彩は、濃紺地に、赤、黄及び緑の配色構成となり、全体としては補色配色、部分的には類似配色で、動と静との巧みな調和美が感じられる。以上、本調査は、未だ不十分な点が多いが、往時の色彩の再現に少しでも参考になれば幸である。